

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	東歐の大聖を懐ふ : 論説
Author(s)	高田, 保馬
Citation	龍南會雜誌, 105: 11-19
Issue date	1904-03-13
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/5667
Right	

海權史論を立案しぬ、本篇は即ち其の一節たる宗像三神論を中心とし、第二章に於て宗像三神は武裝的三神にして出雲民族の流を汲み玄界洋上海權掌握の爲め天降せしを論じ、第三第四の兩章は參考篇とも云ふべきものにして、新羅民族の筑前殖民、武裝的侵入、出雲民族筑前殖民及び婚姻政策の私見を述べ、略々述べべき所を述べ終りぬ。

問題の神代史に關する事、加ふるに菲才なると時間を有せずざるとにより杜撰の譏は甘愛する所、今後自家研鑽の結果と諸大家の指導とによりて此の完きを得んは余の最も期する所なり
久保天隨の言調を借りて曰はしめよ

『今後近き將來に於て本篇を焼き棄つる時は、即ち新宗像三神論を公にするときなり』と
本篇を稿するに就ては教授武藤先生に負ふ所特に大なるを表す、
(完)

東歐の大聖を懷ふ

高田保馬

西亞の神の子悠然として下界を去りてより、大地の旋轉、歴史の葉々を翻して世紀更ること十有九。顧みれば彼が説きし所唯に利劍と鮮血とに過ぎざりしか、番、彼は肉的生命の夢幻に等しかるべきを説き、廣汎の眞愛によれる無窮の永生を教へ、疾呼して曰く、天國は近けりと。而して下界の罪惡

を償贖せんとて、十字架上面を割き血を流し、憤然として安靜の眠に入りたりき。使徒其の志を繼ぎて遠く萬里の波濤を踏破し其の不屈の精神、不撓の熱誠は、三意神の子が聲を傳へて天下の蒼生を漸く迷夢より醒せしめ、そが聖光を仰ぐこと、高く大漠の野に懸れるカノバヌに於けるが如からしめぬ。

悲ひべきかな、生を享けて提げ來れる五尺の臭骸、常に誘惑の道程を教へ、墮落の徑路に導き、嘔くに毒を包める甘言を以てす、是を以て靈性の命する所に從て規を超ゆる如きは殆んど之を求むべからず、聖經が肉慾より起れる罪惡を掩護せむが爲に漸く曲解せらるゝに至りたること又宜ならずや。一世又一代動物的生命は遂に聖教の神髓を沒了し湮滅し去りて、只僅に其の外装を存するのみ、而して曰くこれ神の子が教理也と、あゝ形態を問ひて銅盤の聲響を聽き、光輝を思ひて燭の長短を捫り、以て太陽の眞を得たやとなすもの豈嘗に有宋の盲者のみならむや。あゝ燦然たる虚偽の綾羅錦繡は今や全歐に擴充せられて風俗を飾り習慣を裝ひ、文學を包み藝術を蔽へり。禍なる哉、此の如くもて天國は果して近くべしとするか。死海の強鹹依然として、ヨルダンの水洋洋として更ることなく、年々歳々、金風西海より到りてゴルゴタ丘上菓園深紅の色に染め、橄欖峯頭嶺雲搖曳して去ることなし、昔はこゝに大聖の聲ありき、殷々として天籟の如く迢に無邊の海を越えて響きぬ。而も今や其餘韻何所にか求むべき、無言の山河徒に存して有情の志士の腸を斷たしむ、苟も二代人心の欽仰を博し、後世志士の景慕に値したるもの、何人か赤誠の眞愛より湧出せる美德を説かざりし。星華燦爛として織羅なき碧落に輝く、是れ正義の誠旨に非ずや、金風野を吹いて野

花緑亂玉兔半天に懸りて白露珊々、是れ博愛の眞趣に非ずや。雲烟縹渺遠島の春を鎖し、海波洋々白鷗夢暖なるもの、是れ人道の極致に非ずや。之を悟し之を体して孔子は仁義を説き、マホメットはイスラムを唱へ、釋迦は慈悲を教ふ。正義と人道と博愛と何等光榮ある名詞なるぞ。而して近代の基督教國を見るに只管外装の綺羅を喜びて其眞髓は措いて問ふ所なし、あゝ瓦葺的奕、輪輿人目を眩する教會堂も下界の地表をおほふ讚美の聲もかくて全歐をあげて聖經の下に立たしむるも、已に眞髓を缺かばはた何等の賞讃と尊敬とに値せんや。

博愛と正義と人道との文字は誠に基督教國にとりては光榮ある外装也。而かも敢て問ふ、自己の利益の爲に他の權利を侵害し、自己の優強を恃みて弱小を蠶食せむと力むる、果して聖教の眞髓なりや、見よアルプスの連山は千古の雪を戴きて、且紅暎に煥發し夕銀鈎を沈むる所、融雪流れてゼチバ、コモ、ガールタの湖水湛へ、清冽透徹、溢れてライン、ポーの奔流を作り、北走南注、洋々幾百里、沿岸の沃野は渺茫として淡夢の如き遠丘と連る、自然はかくの如くそれ美也、人の子何を獨り類廢墮落蠢爾として罪惡の巷に呻吟する、可憐の弱小に對して一滴の紅涙を惜むのみならず、寧ろ之を哺噲にせんとし、同等者に對して毫末の信義なく、恣に陷濟の策を弄ふもの、個人然り、團體然り、而して國際の間更に甚しきを認む、吞噬掠奪、汲々として寧日なく、少しく利害の衝突を見れば則ち劍戟閃めき砲火相見ゆ、而して利劍其鋏に飯る時、敗者の髑髏を杯にして凱歌を唱ふる者は誰ぞ、あゝ全歐州、北はバルチツクより南地中海に及び、東ウラルに起りて西大西洋に達す、廣袤三百六十万方哩、走屍の行く所、行肉の匿るゝ所、ただ弱肉強食、文るに排斥嫉妬憤恨憎惡を以

てす、斯くの如きもの果して基督教の文明なるものなりや。

之を過去に尋ねるに、昊天の人に幸するや、その悲境に沈淪し了らむとする時必ずや一の偉靈を下して、以て人生の意義を濟すを得しむ。婆羅門の腐敗階級制度の弊害其極に達するや、恒河の畔々々の聲をあげて狂瀾を既倒に回したるは誰ぞ。王權神聖の迷信に耽り、暴虐と酷薄の外民を御する法を知らざりしチャールスを斷頭台上の露と化せしめ、千歳の下英人をして自主自由の天地に獨立するを得しめたるものは誰ぞ。Cavyleは説いて曰く

We have repeatedly endeavoured to expain—the tall sorts of heros are intrinsially of the same material; that given a great soul, open to the Divine Significance of Life, then there is given a man to fit to speak of this to sing of this, to fight and work for this, in a great, victorious, enduring manner; there is gi Ven a Hero,

果して然らば、孤島屹然以て浩洋千里の潮流を變せしむるが如く、外装ありて眞髓なき滔々たる現今の基督教國文明の進路に立ち、侃々の辯諤々の議、一世救導の大任に膺るものなからむや。ヤスナヤボリヤナの老農、現代第一流の詩人、而して實に東歐の大聖レフ、ニコライキツチトルストイ翁即ちこれ。

翁が前半の生涯は誠に詩人なりき。處女作「生立の記」に名聲忽ち老大家を壓倒し去りてより、「哥索克」に「戦争と平和」に次で「アンナカレンナ」に、神來の興趣を行るに天馬馳空の靈筆を以てす、嚴として不世出の大文豪なりき。われは詩人としての翁を説くものに非ざれば之に就て言をなさざる

べし。而も天の翁を下せるや、脚に無限の意義あり、翁翁を敬虔の隠徒と深沈の畏怖とを以て其の命する所を行はざるを得むや。

寂しき光に輝く明星の瞬にも無限の妙趣を悟るてふ詩人と、コーランか然らずんば劍戟かと振拔して起てる豫言者と何を異の甚しきや。一は漣漪の岸に囁くか如く、一は巨瀑の蒼穹より懸りて深潭に注ぐに似たり、前者を以て暮天にかゝれる新月の幽光とせば、後者は赫々として石をも爍かす烈日に譬へつべきか。然れども此兩者は外觀の異なる如く爾く實の懸隔あるに非ず。一は人の感ずべき啓示を傳へ、一は人の行ふべき啓示を告げ、二者の領域截然として區劃あるを得ず。これ業に既に先哲の道破したる所、見ずや流は咽ぶラインの河邊、藝術の光を慕ひてはフアストによりて人生唯没我にありと絶叫したるゲーテは美の中善を含むを説きしに非ざや。野の百合花は如何にして長つかを思へ、彼等は勤めず紡かざるなり、然れどもソロモンの榮華の極の時だにも、其装ひ此花の一に及ばざりさど喝破したるは古の豫言者に非ざりしか。彼やまことに其裝飾遠く下界の帝王を凌げる百合の一輪より美趣を此汚穢の荒土に認めたるもの、あゝこれ六合の眞美を觀破したる言に非ずや。人類か生みたる最大の詩人として、翕然世界をして其指導を仰がしめたる沙翁が、浩瀚にして深遠なる戯曲の全部に貫流せる生命は唯一の宗教に非ずや。閑寂たる曠野の子、マホメットか經典全部、一面より見る時之れ純乎たる無韻の詩に非ずや。宜なり、古昔の或國語か同一字を以て詩人と豫言者とを顯したりしこと。それ此兩者は誠に別物の觀ありと雖も、全く其飯趣を共にして、只俗界に顯れたる態に於て異なるのみ。そが宇宙の神秘に徹底に悟入するに至りては即ち一なり。

Vates means both Prophet and Poet; and indeed at all times, Prophet and Poet, well understood, have much kindred meaning:..... But now, I say, whoever may forget this divine mystery, the Vates, whether Prophet or Poet, has penetrated into it; is a man sent hither to make it more impressively known to us — Carlyle

論

説

夫れ蒼穹は大地を距る幾萬里の高きにありて、彼の夏日炎熱燒くが如く、萬物枯死せむとするに當り油然として雲を起し沛然として雨を下し。もし北風凜烈蕭條たるときに於ては、こゝに六花繽紛の偉觀を現出す、而かも是れ共に天意が其要に應じて水蒸氣をして變形せしめたるのみ、詩人と豫言者と全く此の如し。昊天偉靈を賦與して天才を下界に下すや、唯適歸するなき迷羊の指導を命ぜむか爲のみ。天才は之を以て方處と時勢とに鑑みて使命を完ふするに最も便宜なる形態をとる、凡そ一代の文物漸く飯趣を得、稍整然として純一ある平和の時代に於ける天才は概ね其形態を詩人にとり、殺伐の氣天地に充ちて、理想の光明全く消滅し去れる時代に生れたるものは大低豫言者を以て自ら任ず。翻りて我トルストイ翁が生を享けたる近世紀の狀勢を思はゞ如何、翁が呱呱の聲をあげ且骨を埋むべき靈國は上には壓制を事とせる專政のザーあり、助くるに頑迷固陋、殘虐を事とする正教會を以てす、下には虚無黨の破壊を之れ天職なりと誇稱するあり。而して貴賤と貧富とに論なく、肉に餓る血に渴せるもの舉國みなこれ也。あゝ強姦と殺戮と、之を以て無辜可憐なるキシネフ幾百の猶太人に加へ狂奔凱歌を奏したる者は誰ぞ。風腥きブラゴヴェスチエンスクの一、夜、黒龍の水を流血となし、江邊積むに五千の死屍を以てして、西比利亞原野長へて鬼哭の歌々をと、めし者は

アンチカレンナの著作は翁が五十七歳の時にあり、而して其詩人的生活は之を以て最終の頁を閉ぢぬ。希世の天才も其使命には従はざるを得ざりし也。當時翁や身は名門の華胄、富巨万を擁し而して其文筆一世の隨喜し心酔する所となり、聲名遠く大洋を越へて人跡至る所其作物を稱へざるなきに至れりき。而も遂に自覺の時は來りぬ、翻然詩筆を抛ちてヤスナヤポリヤナの田園に匿れ、潜心冥思、宇宙の精力を捧げて人生の幸福を思ひ、以て只外装を知りて眞髓なき偽基督教文明の改革者ならむ事を期したり。ツルゲネーンは翁と相馳騁して露國文壇の二明星たりき、將に死せむするや書を送りて曰く『吾友何卒再び著作に御返りあれ、兄か天才は萬物の源より來るものにて候、此望叶はば生が喜如何に候ふべき、生は最早臨終近き者にて候』と、多涙多感なる翁にして焉ぞ亡友がこの最後の忠言に感激せざらむや、されども之を以て自覺せる使命の大なるに代ふる能はざりし也。天下は尽く翁の抛筆を痛惜す、されども見よ、現代の偽基督教文明と露國の殘虐とは、翁の如き天の眞寵を享けたる天才をして悠々詩を樂ましむるべき時を假すべしや。吾人はひそかに翁が一世を救済すべき大命を齎らせる大巨人たるを默契するもの也。

翁が豫言者としての生涯は『我懺悔』に始まる。實に翁をして激昂せしめたるは、只外装を以て凡ての行爲を包み、而して眞髓を欠如したる現歐州の偽基督教文明也。然らば眞髓とは何ぞや、説いて曰く惡に敵する事勿れ、此一語のみと。あゝこれ人の動物的生命を以て理性の命のまゝならしむる事に非ずや、即獻身的眞愛の結果にして人生を至りて始めて眞正の幸福を享有することを得可

し。其教義や實に現代の腐敗に激勵せられて、其の内部生命の苦闘より直覺的に把握し來りたるもの、其理想とする所は現代の盲目なる物質的、肉慾的、主我的文明の潮流に逆航して、直ちに原始基督教の聖なる神の國を斯世に現出せむとするにあり。され天地間二つの眞理あらむや、彼が宗教は誠に獨立獨歩のトルストイがトルストイ教也、然れども必然的に基督教の眞髓と冥合し一致せざるべからざりし也、而して自ら稱して曰く、是れ基督の基督教也と、かくて外装の外一物なき現代文明の聖經曲解に對して叱責し痛罵したりき。

思ふに天の冥寵を受けて下界に降りたるもの、一たび其使命を自覺するや、千難萬苦を排し特立獨行一世の風潮に抗して凜然動かさるなり。かの我眞理中には自然の分身なる大法ありて存す、其階位日月と等しく天地中一物の之に優るものあるなし、苟も萬能の神にして我に許さん限り我は斷じてわが眞理を述べざる可からずと絶叫したるマホメツド見や。サタンよ退け主たる汝の神を拜し唯之にのみ事ふ可しと叱咤したる基督を見すや。天上天下唯我獨尊を稱したる釋迦を見すや。我皮を紙とし我骨を筆にすども所思を陳べてやまひやと憤りし日蓮を見すや。我翁一たび「我宗教」を公にするや、露帝アレキサンドル三世之をして改むる所あらしめむとす。翁曰く、若し陛下暫く袞龍の衣を脱し、君主とせずして單に常人として臣が書を讀み下すと假定し、而して尙一語の以て陛下の意に戻るあらば、臣は直ちに臣が右手を斬らむと何等壯烈の言辞ぞや。眼中已に帝王なく正教會なく露國なく、たゞ基督の基督教、即トルストイのトルストイ教を知るのみ。翁や今方に傲然として宇内に睥睨せる一大巨人也。

猶太の大聖が教理の神髓は己に消滅せられて外装ひとり存し人類の大半は適飯する所を知らざる時
こゝに天才再び降下して眞愛の福音を説く。地は相隔りて西亞と東歐、時は相距る一千九百年、其
間兩者の一呼一吸直に相通するものなからむや。あゝ、かつて光明を興へられたる世界は暫く黑暗
の裏に葬り去られむとせしも今や東歐に大聖あり、曙光は東山に輝きそめぬ。

頭首を回せば今吾人の周圍をめぐるもの、排斥に非ずんば罵詈也、嫉妬に非ずんば怨恨也、憎惡に
非ずんば紛争也、殘忍に非ずんば壓制也、利劍に非ずんば砲丸也、鮮血に非ずんば死屍也。苟も人類
の飯趣を考へ和平を慕ひ幸福を思ふもの、誰か暗涙の潜然たらざるものあらむや。此時に當り儼乎
として一管正義の鉄笛を吹く大聖出で、悲哀の暗黒に沈める我に光明を興へ、我胸中の波瀾を靜
ならしむ。あゝわれ等が頭に永しへに宿れトルストイの愛。

